

第34回全日本少年サッカー大会

2010年 8月吉日

兵庫フットボールクラブ
監督 永浜 和紀

決勝トーナメント進出 逃がす

- 7月29日(木) 午後9時 加古川を出発
名神高速から北陸道・磐越道・常磐道、広野ICへ。およそ950kmの道のり。
12時間かけて、車の少ない高速道をゆったり走りました。
試合会場のJヴィレッジへ入り、会場内を散歩。試合をするグラウンドを確認。
子どもたちの顔は、試合をする姿をイメージしているのか、真剣。
その後、宿舎までの道のりを確認しながらチェックイン。
昼食をすませ、ゆっくり休んだ後、夕方のトレーニング。
- 7月31日(土) 午前7時朝食。9時30分キックオフに合わせて、トレーニング開始。
食事の量・お腹の調子を確認し、各自、最高のコンディションで試合に臨めるように
練習量等の調整。
午後2時、全国大会会場 「Jヴィレッジ」へ出発。
午後3時30分、開会式。
各都道府県を勝ち抜いた精鋭48チームが並ぶと、壮快。
午後5時、宿舎に入り、ミーティング。明日に備えて完全休養。
子どもの目がきらきらと輝いている。
- 8月 1日(日) 5時30分起床、6時30分朝食。朝一の試合ではいい結果を残せない不安はあったが、
選手は自信たっぷり。待ちに待った試合が始まる。

午前9時30分 キックオフ

兵庫FC 0 - 0 岩瀬FC (福島県代表)

緊張感のせい、互いに決定機を作れないまま後半へ。セナが体調不良で、ダウン。

失点の心配はないが、得点チャンスもない重苦しい雰囲気。

苦しい状況を打ち破るアイデアも闘争心もない平々凡々の試合展開で終始。この日の試合に照準を合わせてこなかったコンディションなので志方がない。我慢のしどころ。

午後2時30分 キックオフ

兵庫FC 1 - 1 大宮アルディージャ (埼玉県代表)

セナが先発できない試合で勝利を得ることの確率は低い。この試合は負けても、「残り3試合で、決勝トーナメント進出を狙う。」腹づもりで試合に臨む。

大宮の猛攻を予想したが、昨年の失敗をおそれてか、攻めてこない大宮。クロスボールを予想して、GKにエースを先発させたが、クロスボールはおるかミドルシュートもな

い。そんな静かな試合展開の中、G Kの集中力のないプレーでオウンゴール。大量失点を予想したが、後半、攻撃陣の頑張りから同点ゴール。敗戦を覚悟で臨んだ試合を引き分けて終え、決勝トーナメント進出への重要な勝ち点1を獲得。

8月2日(月) 起床時刻・朝食の時刻を15分早めて、試合に臨む。

午前9時30分 キックオフ

兵庫FC 2 - 0 大社FC (島根県代表)

気持ちの高まりを感じない試合内容。しかし、あわてる様子も感じない。

「心静かにチャンスを待つ。」

頑張らせるのは、もっと先。4日の決勝トーナメントで、最高の力を引き出す。

そう考えて調整してきた。予想通りの試合内容。

宿舎では、初勝利で気持ちがほぐれたのか明るい表情。明日の試合に勝てば、決勝トーナメント進出という自信が、あふれていた。決勝トーナメント進出をかけた試合に備え、翌朝のタイムスケジュールをさらに15分早め、5時起床、6時朝食。そのために、8時30分消灯。

しかし、勝利に酔いしれ、希望に胸ふくらませた選手の興奮が、指導者の予測しない行動をとらせた。

午後10時頃、子どもの部屋を見回った堀江コーチが、落胆の表情で「寝ていませんでした。」

明日の試合の重要性を理解しているはずの選手が、まだ、寝ていなかった現実。「眠れないからと他の部屋へ遊びに行っている。」「そんな選手に誰も注意しない。」

「こんな状況の選手が明日の試合に勝てるのか。」顔が曇り、一人考え込む堀江コーチ。

「これが運命かもしれない。指導者としてできることはすべてやってきた。あとは、選手の気持ちだけ。」

そう言ってコーチをなだめたが、幼稚な子どもたちの限界を超えた世界を感じた。3泊4日の合宿を経験させているが、4泊目は初めて。この子達の限界はここまでなのかもしれない。今更しかっても手遅れ。天命を待つ心境。

8月3日(火) 決勝トーナメント進出をかけた重要な一日。

午前9時30分 キックオフ

兵庫FC 3 - 0 藍住南FC (徳島県)

セナのいないチーム事情を感じさせない試合内容で相手を圧倒。

相手チームのオフサイドトラップに慣れてきた選手は、後半猛攻を見せ、チャンスを作る。冷静にシュートを打てれば、大量得点の試合。勝ち点3を積み重ね、決勝トーナメント進出を目指す。

午後2時30分 キックオフ

兵庫FC 0 - 2 あぐり西町FC (長崎県)

「人生を変える試合をしてこい。」

昨夜の出来事を思い出しながら、そう言って送り出した。試合への入り方も良く、期待の持てる内容。前半をおさえてくれれば、セナを投入し、無理をさせてでも勝利を奪いに行く。そんなゲームプラン通りの試合を感じた矢先の出来事。

ゴールを飛び出し、相手FWに飛び込んだGK八本が、うずくまったまま動かない。審判はそのまま試合を流し、ゴールは無人のまま。あわてふためくDF陣。ボールを外にけり出せないまま試合は流れている。それでも、審判は試合を止めない。そして、無人のゴールへボールが吸い込まれていく。後半、山崎のシュートがバーをたたくが誰もつめていない。残り7分セナを投入し、左サイドからクロスボール。フリーの大西がヘディングシュートしたが、ボールは左ポストをかすめる。落胆の続く終了間際に、相手チームのエースにミドルシュートを決められ万事休す。

左目を腫らすGK八本の目は、幸いにも眼球までつま先が届いていなかったため、大事には至らず。決勝トーナメント進出を逃がしたが、18名の選手・応援の7名の選手が一つのまとまったチームの姿を見せてくれた。昨晚、この状況になってくれているならば、神様は違う結果を用意してくれていたかもしれない。

宿舎に帰ってから、一人、食堂のホワイトボードに子どもたちへのメッセージを書いた。隅っこに「ありがとう。」と言う言葉と、「次は必ず勝ちます。」という返事が書いてあった。

8月4日(水) 交流試合&決勝トーナメント観戦

同じ関西で、いつも試合をしているエグゼ・高田FCが、ベスト4進出。フォア・ザ・チームのスピリットを見せ、頑張り続ける姿に感動。

夕食の後、選手に次のような話をした。

「エグゼや高田のGKだったら、倒れたまもうずくまっちはないだろうな。目から血が出ていてもゴールへ戻るだろうな。八本のプレーを批判するつもりはない。八本も必死でゴールを守り続けてくれた。自分の限界を超えることへの恐怖と戦いながら、選手は伸びていく。経験したことのない苦しさや痛さを乗り越える強さを我々は持っていなかった。眠れないという理由で、友達の部屋に行く心の弱さを自分自身が変えていかなければならないし、そんなチームメイトを注意する意志の強さを持たなければならぬ。そのことの重要性を常に言い聞かせてきた。そして、そうなりつつあった。最後の最後に自分への甘さが出た。この大会の結果をそうとらえて今後に役立ててほしい。」

ベスト4という目標を立て、決勝トーナメントで最高のパフォーマンスを発揮させる。そのための、コンディショニング調整に取り組んできた。しかし、第1試合で、セナがリタイア。この現実、指導者として責任を感じている。全く予想しなかったアクシデント。私自身の運命もこのレベルかもしれない。もう一度、チーム作りから考え直し、子どもたちへ恩返しをしたい。

多くの寄付金 ありがとうございます。

総額 725000円

ボーイズの選手へのおみやげ代
全国大会登録ユニホーム・パンツの購入
応援の選手の宿泊代補助
医薬品 等に使用しました。

詳細は、ホームページで報告させていただきます。